

## 巨大な門跡を検出

### 大津市 瀬田廃寺(せたはいじ)遺跡



門跡検出状況

#### これまでの調査経過

瀬田廃寺遺跡は、大津市神領三丁目・野郷原一丁目の瀬田丘陵から派生し北西に延びる丘陵の先端に立地しています。古くから心礎(しんそ)を含む5個の礎石(そせき)が残る塔跡の存在が知られ、周囲からは古瓦が出土していました。昭和34年(1959)に名神高速道路建設に伴い発掘調査が行われ、塔のほか金堂、僧坊、回廊などの遺構が見つかっています。また、平成12・16年度に行われた発掘調査で、金堂の北側に講堂の存在も確認されていることから、塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺(してんのうじ)式の伽藍配置を持つと考えられます。塔・金堂の建つ基壇は、いずれも、瓦を積み上げて基壇化粧とする瓦積基壇(かわらづみきだん)と呼ばれるものです。また、塔の礎石は心礎を含め5つしかなく、四天柱(してんばしら)のない特異な構造のものです。

現在、金堂は工事で失われていますが、講堂や塔跡などは残っており、塔跡部分には石碑と説明板が立っています。

## 平成 18 年度の調査結果

### 【造成工事】

元々、南東から北西に向かう丘陵であった所に、平坦な地域を確保するため、調査地の南西部分は大規模な造成工事によって埋め立てられています。白色粘土、赤黄色粘土などを使って交互に繰り返し埋め立てた結果、地表にきれいな縞模様がみられます。埋め立ての土からは遺物は出土していませんが、今後の断ち割り調査などにより、造成の時期が判明するかもしれません。

### 【門】

塔の真南 37m の地点で東西に並ぶ 4 つの大きな穴が確認されました。穴の並び方や南築地塀との繋がり関係等から、門の礎石を据えた穴であることがわかります。穴の平面形は最大のもので直径 2.6m あり、中央の柱間は 5.1 m、両側の柱間は 4.5m もある巨大な八脚門が復元できます。八脚門とは扉が取り付け柱列の内と外に 4 本ずつ、計 8 本の柱が建つ門のことで、格式高い門です。残念ながら礎石そのものは残っていませんでした。穴の断面の様子から掘立柱を礎石建ち建物に改造したのではないかとされています。また、門の規模は、県内最大で、築地塀が取り付けことから瀬田廃寺の南大門と考えられています。

### 【築地塀】

寺の南辺と西辺を区画する築地塀で、南築地塀は東西 16m、西築地塀は南北 28m 分見つかりました。築地塀の両側には、雨落ち溝があります。この雨落ち溝の間は幅約 3m あり、溝の内からは瓦が多数出土しています。また、塔や金堂などの軸線は近江国庁の建物と同じく北に対してわずかに東に振るのに対し、西築地塀は西に振っています。瀬田廃寺の場合は地形との関係上このような方向をとることになったのでしょうか。南西隅は削られてなくなっ

ました。

#### 【火葬場】

寺域南西隅の大きな穴の平面形は南北約7m、東西約6mの楕円形で、すり鉢状に掘られています。深さは55cmで、底にはさらに南北1m、東西50cmの方形の穴が掘り込まれており、その壁面は火熱を受けて赤く変色しています。穴の底には炭化した木などと一緒に人骨と思われる焼けた骨片が残っていました。おそらくここで火葬し、おおかたの人骨を取り上げたのでしょう。土層の観察から大きな穴は、西築地塀の雨落ち溝を壊して掘られており、火葬後、自然に埋まったようです。

#### 【井戸】

塔の南西24mにあり、東西に2基並んで見つかっています。平面形は南北2.1m、東西1.7mほどの楕円形で、瓦が中央に落ち込んだ状況が見られません。

#### 【遺物】

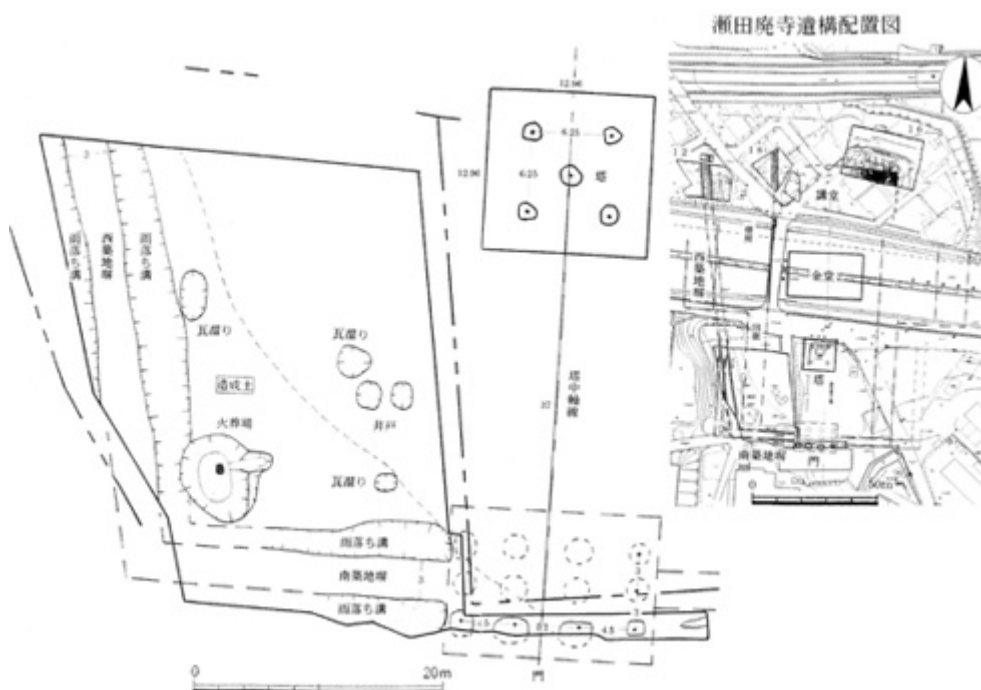
遺物には多くの瓦や土器のほか、金銅製の飾り金具が見つかっています。瓦のほとんどは丸瓦・平瓦ですが、紋様のある軒先の瓦も見つかっています。出土する瓦のうち、奈良時代のものには、外縁に線鋸齒文(せんきょしもん)の廻(めぐ)るものや飛雲文(ひうんもん)が配置されるものなどがあり、近江国庁や、古代の官衙や寺院などに想定されている堂ノ上遺跡・惣山遺跡・石山国分遺跡などから出土するものと共通する特徴を持っています。

特に、近江国庁とその周辺の役所関係の遺跡から出土する飛雲文の軒瓦は、瀬田廃寺の創建時に葺かれたものと考えられています。

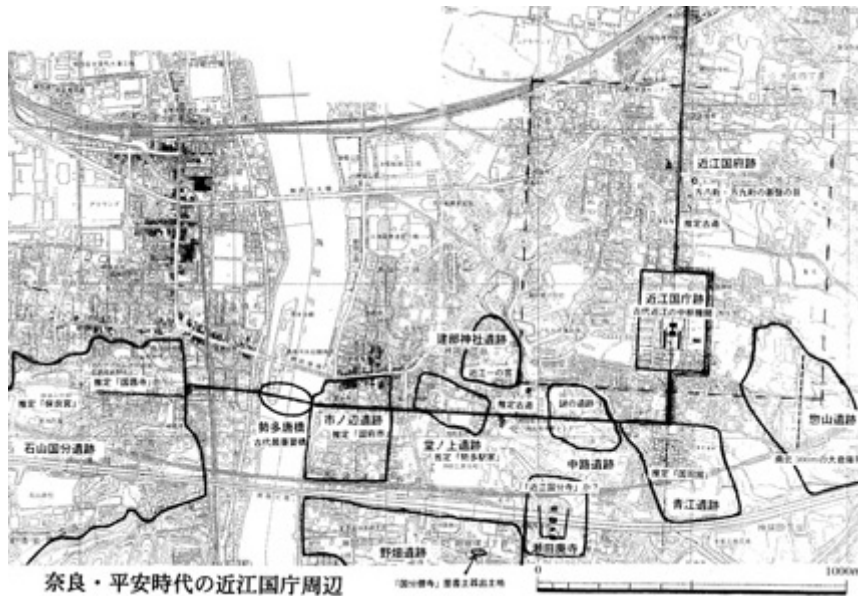
土器には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などがあります。金銅製の飾り金具は長さ19cm、最大幅11cm、厚さ1mmで、透かし彫りが施されています。現状は錆で覆われていますが、X線撮影により釘穴や毛彫りの細かい線などが確認され、また、一部に金が残っていることもわかりました。建物を飾っていたものと思われます。



飾り金具取り上げ直後



遺構図と遺構配置図



近江国庁周辺の遺跡群

### 瀨田廃寺は近江国分寺か？

瀨田廃寺の存続期間は、出土した瓦などから、奈良時代から平安時代に及びますが、繁栄のピークは奈良時代にあったものと考えられています。また、近江国分寺については不明な点が多いのですが、平安時代の歴史書『日本紀略』に、延暦四年(785)に国分僧寺が全焼したので弘仁十一年(820)に定額国昌寺(じょうがくこくしょうじ)をもって国分寺とするという記事があり、今回の調査で格式のある大きな門跡が見つかったことから、焼亡後、国昌寺に移るまでの間、瀨田廃寺跡が国分寺であったという可能性が高くなったとされています。

近江国分寺が瀨田にあったとする説は、正中二年(1325)の文献『叡山末寺領注文』に「勢多国分寺敷地」とあることを主な根拠としています。瀨田にある唯一の寺院跡である瀨田廃寺跡がその国分寺であるとしているのです。瀨田廃寺の南西にある野畑遺跡から、「国分僧寺」と書かれた墨書土器が出土していることもそれを裏付ける証だとされています。しかし、「勢多国分寺敷地」の記述も、「勢多にある国分寺が所有する敷地」なのか、「国分寺の所有する勢多にある敷地」なのか、明確ではないとする見方もあります。また、『日本紀

略』の記述には三十数年の空白期間がありますが、全焼したことが理由で国昌寺に寺格を与えられていることから、前身の国分寺跡にはその痕跡が残っていないかもしれません。瀬田廃寺跡では、昭和34年の調査で、塔跡のみが焼け、平安時代に再建されていることが明らかにされています。

今後、より一層正確な史実が明らかになる発掘調査の成果が期待されます。

県内での馬形埴輪の出土例は、近江八幡市千僧供(せんぞく)古墳、野洲市御明田(ごみょうだ)古墳、久野部1号墳、林ノ腰古墳、守山市川田遺跡など比較的多くの古墳から出土しています。これまでのものは頭部や頭部からたてがみの部分の破片が多かったのですが今回後脚部分が出土したことで、これまで不明であった近江の馬形埴輪の全容を知る上で、大いに参考になる資料であると言えます。

(発掘調査 大津市教育委員会)